



三好省三の

錦鯉ルネサンス

温故知新 ①

初代「落ち葉しぐれ」誕生秘話

近所にある古寺の大銀杏の葉が今年もみごとに黄葉し、その葉を落とし始めた。閑散とした境内が黄色のグラデーションで彩られて、しみじみ美しい。毎年この光景を目にするたび、私は初代「落ち葉しぐれ」のことを想い出さずにはいられない。

それは今から三十五年ほど前のこと・・・私がまだ二十歳そこそこの頃のことである。「おいっ、省三！掃き溜めに鶴みたいな鯉を見つけたんじゃ。今すぐ、りんりんパークまで出て来いよっ！」

いつも冷静沈着な父（故・三好幸雄）が、たいそう興奮して電話をかけてきたので、これはただごとではないのだろうなと推測し

鯉を貰ってウジャウジャ群れている中の一匹だった。

「アレじゃ・・・あの鯉じゃっ！あの鯉を捕まえろっ！」と、いくら父に指差されても、いったいどの鯉だかわからないくらいたくさん泳いでいたので、胴長を穿いて捕まえるのにも骨が折れた。

七〇cmぐらいはあっただろうか、今まで見たこともないようなブリブリに太った得体の知れないその鯉は、抱き上げるとズッシリと重たく、手の中で暴れる力も私の初めて体験する強さだった。

つつ、私はりんりんパークへ車を走らした。そのとき、カーラジオからピンクレディーの『UFO』が流れていたのを覚えているので、やはり昭和五十年前後のことだろうと思う。

りんりんパークというのは、当時「錦鯉とつつじの公園」と銘打たれた愛媛県は西条市に位置する観光施設のことである。立派なつつじの庭園を設え、そこには大きな池もあって、色とりどりの錦鯉をたくさん泳がせているというシチュエーションだった。

たしか十円ほどを払って鯉を買えば、誰でもそれらの鯉に餌をやる事ができた。四季を問わず鯉を食べているものだから、だらしなく太った錦鯉が投げ込まれた餌にウジャウ

× × ×

連れて帰って、その鯉をあらためて眺めてみたが、どうみても私には茶鯉の出来損ないにしか見えなかった。

しかし、親父ときたらいつになく上機嫌で、「シビれるねえ、省三・・・この鯉を誰に売ればええのか、どうせお前にはわからんじゃろ？」などと気炎を吐いている。

「それより親父・・・この鯉は、ホンマに錦鯉なのか？」と訊いてみると、呆れた顔つきで、「お前のような凡人には、この鯉の良さがわからないだろうが、この鯉はなあ、ウチ

現在、錦鯉業界では世代交替が進み、若いパワーがそこかしこにみなぎっている。その一方、古き良き時代を知る方が鬼籍に入られ、かつて錦鯉と謳われた錦鯉や伝説の業界人など、錦鯉に関わるあれこれ忘れの彼方へと遠ざかっていくことにかすかな悲しみを抱いていた。

過日、三好省三氏にお目にかかり、錦鯉に対する並々ならぬ熱情と「故きをたずねて新しきを知る」の言葉を聞いたとき、往事の思い出を甦らせるには三好氏の力を持ってするしかないことと決意し、後日、ご多忙とご迷惑を承知のうえで、過去の業界などについて語っていただきたいとお願いした。

本稿は、快諾いただいた三好氏によって実現した。忙しい本業の合間を縫ってのご寄稿のため、不定期掲載となることを読者のみなさまにはご了解いただきたい。（編集部）

ジャと群がっていたという記憶がある。

庭園奥に造られた建物内に入ると、小さく区切られた水槽がいくつもあって、下は「百万円」から、上は「一千万円」くらいまで、やたら高い価格が付けられた錦鯉を展示したブースがあって、観る人を驚かせる趣向となっていた。当時の愛媛県人なら、一度くらいは話のタネに足を運び、高度成長期の豊かさを享受できるような、そんな場所だったと思う。

はたして、そんなりんりんパークで、親父が見つけた「掃き溜めに鶴」のような鯉というのは、まさしく言葉の通りで、建物内にある高価な鯉の方ではなく、外の庭園で十円の

のお客さんきつての芸術家、川西進さんの所へ持って行くんじゃ。川西さんしか、この鯉の味がわからないからな」と、きつぱり言いきった。

川西進さんという人は、香川県で漆塗りの工房を経営されていて、ご本人自らも絵筆をとり、時絵を施したみごとな漆器を制作されていたらしい方だった。

さあ・・・それから一週間くらいはウチの池で泳がしていただろうか・・・。三好が妙ちくりんな鯉をりんりんパークから買って来たという噂を聞きつけた大勢のマニアの方々が次々と見に来て来たのだが、誰もが「なんじゃこりゃ？」という様相で、一人も誉めてくれないどころか、散々こき下ろされるといふ始末だった。

にも関わらず、そんな酷評もどく吹く風の親父はますます有頂天で、その鯉に惚れ込んでいったようだった。そして、いよいよ川西進さんにお披露目する日がやってきた。が、私としては、そんな得体の知れない鯉を見ていただくのは、はなはだ気が進まなかったのだ、桶に鯉を移したあとは、遠巻きに父と川西さんの様子をうかがっていた。

川西さんにはわかりやすいクセがあって、もし彼が徹底的に鯉をけなし始めたら、大い



初代「落ち葉しぐれ」



万葉の歌人は 水に漂う紅葉の美しい様子を 錦と詠んだという

に鯉を気に入った証拠である。そして「いい鯉を見せてくれてありがとう。どうぞ持ってお帰りや」とおっしゃったら、すみやかに鯉を撤収しなければならぬ……。いつもそんな調子だったので、はたして今日はどうなんだろう？と思つて息を殺して見ていたが、どうもいつもと勝手が違っている。

川西さんは腕組みをして、ただウンウン唸っているだけで、何も語ろうとされなかった。そんな沈黙がしばらく続いたあと、ようやく彼が口を開いたと思つたら、「三好くん：この鯉は錦鯉なのか？」と、私と全く同じ質問を父に投げかけたのだった。その問いに対して、父は日本古来の文化である『見立て』という表現方法を用いて応えた。

「川西さん・錦鯉という名前はねえ、錦織物のように鮮やかで美しいことに由来して

べらぼうな値段で売った」という噂がたちまち日本列島を駆け抜け、ついにその噂は黒木健夫氏（初代愛鱗会会長）の耳にまで届くところとなったのである。



そんなある夜、突然、黒木氏から電話がかかってきた。あとで親父に聞いた話では、のっけから黒木氏は「三好君・キミはずいぶんおもしろい鯉を川西さんに売ったそうだね」とおっしゃったそうで、声のトーンにはかなり皮肉が込められていたように感じたと言う。

「それはいったいどんな鯉なんだね？」と問われたので、「それはまあ・ギンナンの落ち葉が水に浮かんだような・」などと抽象的な表現ばかりでお茶を濁していた父だったが、最後に「芸術のわかる人にしか、あの鯉の良さはわからんでしょうなあ・」。とにかくいくつか品評会に連れていきますんで、そのときにじっくり観てやってください」と話を締めくくって電話を切った。

そばで聞いていた私は、なんだかとても憂鬱な気分になってしまったものだったが、今にして思えば、私自身があの鯉の魅力を理解していなかったたので、不安になってしまったのだらうと思う。

その後、川西さん宅へお伺いしたときに、

いるという説もありますが、万葉の歌人が、紅葉した落ち葉が川面に浮かんで美しい様子を『錦』と詠んだことから、錦鯉と名付けられたという説もあります。この鯉が泳いでいるところを、まあ観てください」といいながら、父はおもむろに鯉を抱き上げて川西さんの池に放した。

「どうですか。まるでギンナンの落ち葉が漂っているように見えるでしょう？これぞ、まさしく錦の鯉です」

たしかに若いころのこの鯉は、さえざえとしたブルーグレーの地体にはくすみもなく、黄土色の斑紋が明るく鮮やかで、覆鱗が際立っているせいなのか、鱗一枚一枚がまるで黄葉した銀杏の葉が幾重にも重なって水に漂っているかのように私にも見えた。

そのような景色をしばらく眺めていた川西さんは、「よっしゃ、わかった・もろとくわ」と言つて、一切値切りもしないで買つてくださったのだった。

意気を感じた男二人のあの時のやりとりが、今でも私の脳裏に焼き付いて離れない。

しかし・・・話はこれだけでは終わらなかったのだ。

「三好が二束三文の妙な鯉を、川西さんに

「いろいろな人がコイツを観に来て、三好に騙されて気の毒だと言うもんだからね、反対に私は言つてやりましたよ。この鯉の良さがわからないアナタの方がよっぽどお気の毒ですねっ、てね！」

その川西さんの言葉で、私の不安感が一気に払拭されたのは言うまでもない。その後、健やかに成長していったその鯉が、ついに全国展デビューを果たし、変わりものの部で種別日本一を頂戴したのだが、それには嬉しいオマケまで付いてきた。黒木氏から「落ち葉しぐれ」という素敵な名前を命名して頂いたのだった。

ついに初代「落ち葉しぐれ」が誕生したというわけである。そのときの審査購評で黒木氏は「ムクムクとした体つきと、愛らしい顔まるで小熊のように可愛らしい」と評してくださっていた。



あれから月日は流れ、かつては川西進氏の代名詞のように言われていた「落ち葉しぐれ」という鯉は、今ではすっかり品種として定着し、たいへんポピュラーな錦鯉となっている。諸行無常ということなのだろう。

銀杏の落ち葉の舞い散るこの時期になると、まるであの鯉の命日でもきたかのように、繰り返し呼び起こされる記憶の物語である。

「見立て」の文化

「見立て」とは、日本古来からある伝統的な表現方法で、文字どおり、あるものを何か別のものに見立てて表現する方法である。

たとえば枯山水などは「見立て」文化の最たるもので、水のない庭に白砂や小石を敷いて、水面や大海に見立てたり、石を配して山や岩に見立てたり、わずかな木を効果的に使つて森に見立てたりして、自然界や宇宙の広がりを出している。

想像力を研ぎ澄まして観れば、視覚に伝わったものが、やがて心を動かす、感動へとつながる。これぞ日本の美学であると思つた。

故・小川平吉氏（初代・小川養魚場社長）は、「見立て」の表現方法の中でも、特に擬人法をよく用いて鯉の説明をされていた。

「この鯉はいつまでも若くて、森田健作のようにまだまだ青春していますよ」とか、派手で初々しく大模様の鯉ならば「永遠の処女と呼ばれた女優の原節子のような鯉です」とか、地味だけれど質の良い鯉なら、「女優の田中絹代のようにしつかりした飽きのこない鯉です」などというふうには、銀幕のスターになぞらえて説明しているのをよく耳にした。

当時、まだ若かった私には見立てる俳優が古すぎて、あまりピンとこなかったが、同世代の人には効果抜群のようだった。

間野實氏は、しばしば鯉を着物の柄に見立てていた。昭和三色の、まだ墨の出きつていない部分を差して「この墨の出ていない部分は、着物の柄でいうと『絞り染め』の部分だと思ってください。くつきり墨が出ているよりも、むしろずっとこのままの方が味わいが深く、奥行きが感じられて私は好きです」とか、赤三色の緋と墨の重なった部分が嫌だと言う人には、「喪服はね、『紅染め』と言つて、最初に全部赤く染めた生地の上から、さらに黒く染めた物が最高の黒色だと言われているんです。だから葬式で黒ばかりの中でも、『紅染め』の喪服は、ひととき目立ちます。この緋の上に重なった墨にはね、ツボ墨の鯉にはない、えも言われぬ美しさがあるんですよ」などとおっしゃっていた。

お二人とも表現方法は違っていたが、日本人に根付いた「見立て」の心をみごとにくすぐって、ストレートな表現よりも、よほど説得力があった。

「赤いだの白いだのは馬鹿でも言えるんですけど。想像力をかきたてるような独自の表現ができないと、この群雄割拠の時代に生き残っていきませんよ。とにかく感性を磨きなさい」とは、小川平吉氏の私に対する訓示であったが、ありがたい先輩のお言葉に添えることなく未だに無粋で朴念仁の我が身が情けないことである。

もう一つの

落ち葉しぐれものがたり



初代「落ち葉しぐれ」の終の住処が、新潟県の大日養鯉場であったことを知る人は少ない。その経緯もなかなかドラマティックだったのでここに紹介したい。

初代「落ち葉しぐれ」のオーナーであった川西進氏と初代大日養鯉場社長である間野實氏との関係は、実に深いものだった。まだそんなに有名でもなく、「質は良いけれど、模様がねえ・・・」と、世間から批評されていた時代の大日の鯉を、おそらく一番たくさん買っただけだったのが川西進さんだったと思う。どんなに型破りな鯉でも、「これが個性なのだから」と言って、間野氏の勧める鯉なら、たいがい買っただけだった。

そして「大日の鯉はいい・・・大日の鯉は模様が悪いところに味がある」と言って、いつも誉めてくださっていた。そんな川西氏に対して「俺はねえ・・・川西さんには足を向けて寝られないんだあ」という間野氏の言葉を耳にしたのは一度や二度ではなかった。

ある日、間野氏は私の親父に「俺は川西さんの落ち葉しぐれが欲しいんだ。三好さん：何とかしてくんねえかなあ」と話を持ちかけた。

言うた大日さんの方が、ワシよりもよっぽど酔狂で狂気の沙汰じゃと思うわ！」と言っただけで笑っていた。

すると「俺はね、歳をとってからの『落ち葉しぐれ』の方が好きなんだ。だんだん枯れてきて、どんどん凄味と、味が出てきて・・・今が一番美しいんじゃないかなあ。省ちゃんもそう思わないかい？最近では鼻筋まで通ってきて、人間の顔みたいになってきた。何かが宿っているんじゃないかと思う時さえあるさね」とおっしゃった。

確かに晩年は顔の真ん中がだんだん隆起してきて、鼻筋が通っているように見えたし、とにかく顔が大きいものだから、人間の顔に魚の胴体をくっつけたような様相を呈している、迫力あることこの上なかった。

「枯れた美しさを演じられる唯一無二の鯉なんだ。侘びも寂びもあらあね！」と間野氏は笑っていらした。

「それにしても、黒木会長も『落ち葉しぐれ』だなんて、粋な名前を付けてくれたもんだね」と私が言うと、「なあに、三浦洗一の歌が好きだったんだろうさ。省ちゃんが生まれるずっと前に流行った曲だから知らないだろうけど、三浦洗一の『落ち葉しぐれ』っていう曲を、俺は子供のころラジオでよく聴いて

た。父は「大日さん：あの鯉はもう年をとっているから売りものにはならないし、新潟に連れて帰っても、すぐに死ぬかもしれないよ。それでもええのかね？」と訊くと、「売るだつて？そんなとんでもない。俺だつてねえ・・・本当に好きな鯉を商売抜きで持つてみたい時もあるんさねえ」と間野氏が応えた。

ところが「落ち葉しぐれ」は川西氏の一番気に入っている鯉だから、お金で売ってくれるはずもない。間野氏と親父は相談して、その年の大日三歳の頭だという紅白を、新潟空港から高松空港に送らせることにした。かくして二人は三歳紅白の頭を携えて、川西家へと向かったのだ。

その日二人は、意気揚々として帰ってきた。私の顔を見た瞬間「交換できたぞおー！」と言っただけで、間野氏は嬉しそうに・・・とても嬉しそうに笑った。

なにゆえ彼があんなにもあの鯉を切望したのか、そのときはまだ知る由もなかったが、それから間野氏と父と私の三人で池のそばまでテーブル運び、さっそく「落ち葉しぐれ」を肴に酒を呑んでいたことである。普段は口数の少ない間野氏がポツリポツリと語り始めた。

「長く鯉をやっているとね、こういう茶鯉と

いたんだ。へただどもちよつと歌ってやろうかね」と言っただけで、酔いも手伝ってか、珍しく一節歌ってくださった。

♪旅の落ち葉が しぐれに濡れて
流れ果てないギター弾き♪

なにやら物悲しいメロディーが心に沁みる秋の宵だった。

その後、新潟に渡った初代「落ち葉しぐれ」は、ほどなくして死んだが、間野氏と彼の愛した初代「落ち葉しぐれ」との蜜月は、短くとも濃厚だったに違いない。

あれから四半世紀以上の時が経ち、大日養鯉場へ伺った際に、大きくて素晴らしいオレンジ黄金が泳いでいたので、現社長である太氏に値段を訊いた。

「あの鯉は売りません。あの鯉は私の趣味の鯉なんです。私も商売抜きで鯉を欲しいと思うときもあるんですよ」と照れながら言う彼を見ていて、血は争えないもんだなあ・・・と、なんだかたまらなく嬉しくなった。



空鯉の張り分けみたいなの、似たような鯉をたまに目にしたこともあったんさね。だけどコイツは別格だね。今まで見た鯉と品格が違つてらあね。今までこういうタイプの鯉を、だあれも美しいと評価しなかったんだだけだね。三好さんが風穴を開けたってことだね

「昔、小川陽一郎（間野氏の尊敬する伝説の鯉師）が俺にね、『大日は鯉は見えるけど狂気がない』なんて言われたことがあつてのう・・・俺は長い間、狂気っていうものが理解できずに、心のどこかで悶々としていたんだけど、三好さんがこの落ち葉しぐれを見つけたときに、俺に電話をかけてきて、とにかく「スゴイんだ、美しいんだ」の一点張りだね、愚かなくらい無邪気に喜んで自慢して、まるで子供みたいだったんだ」

「そのあと、高値で売った三好さんと、それを買った川西さんの経緯を聞いて、ああ：これが陽一郎の言う『狂気』なのかって、初めて悟ったような気がしたんだ」

「つまり、狂気、っていうのはね、誰はわかることなく、自分の感性にしたがって、無心で陶醉するっていうことじゃないかと思っただ」

間野氏の話聞きながら酒を呑んでいた親父は、「この老いた鯉を、いまさら欲しいと

あとがき

先月、親戚の法事に参列した際に、若いご住職の法話を聞く機会に恵まれた。

彼曰く「生きものは二度死ぬ」らしい。一度目は、心肺が停止して生体反応がなくなったときで、二度目はこの世の誰からも忘れ去られたときとおっしゃった。この世に語り継がれる歴史上の人物は、永遠の命を授かった数少ない存在であるという。

それは何も人間だけに限られているわけではない。リチャード・ギア主演の映画でアメリカでリメイクされ、日本ばかりか世界中まで涙させた『忠犬ハチ公』などは、未来永劫語り継がれて、永遠の命を授かった希有にして見上げたワン公であるということだった。

だから、法事るときは思いっきり故人を偲んであげて、二度も死なせないようにしてあげましょうね・・・という、まあ普通のオチではあったが、若いお坊さまらしく、なかなか切り口が斬新だと思った。

特に敬虔な仏教徒でもない私だが、別の鯉を対象に書き進めていた本稿を、急遽、私をもっとも永遠の命を授けたいと思われ鯉に変更してみた次第である。

初代「落ち葉しぐれ」が未永く皆様のお心に遺りますれば、誠に嬉しいかぎりです。